
紅葉が見たもの

Melody ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅葉が見たもの

【Nコード】

N1852S

【作者名】

Melody♪

【あらすじ】

アイツが最初に俺の前に現れたとき。

そのときは確かに、ただの「知り合いの姉」ってだけだったんだ。

そのときは確かに、特別な印象さえなかったんだ。

そのときは確かに、こんなことになるとは思いつかなかったんだ。

出逢いのきっかけ（前書き）

ミツバ篇の銀さん視点です。

銀さんのイメージ壊したくない方は、即刻Ｕターンしてください

出逢いのきっかけ

トゥルルル

万事屋の電話が鳴った。

「あ、銀ちゃん、電話なってるアルヨ」

俺は「おー」と返事を返しながら受話器をとった。

「もしもしー、万事屋ですけどー」

「あ、旦那ですかイ？」

受話器からはという沖田の声が聞こえた。

「んあ？ お前いきなりどーしたんだ？ なんか用かー？」

「悪いんですけどねイ、暇だったらちよつと来てほしいんですが」
依頼か？ にしては声が嬉しそうな感じが。

「まあ時間はあるけど。何処に行きやーいいんだ？」

「あの、バトルロイヤルホストがあるじゃないですか、あそこです」

「ああーわかったわかった。行きやーいいのな？」

「ありがとうござえやす！」

なんなんだ、アイツは。なんか妙に急いでるっぽかったけど。

取り敢えず、バトルロイヤルホスト？ あそこ行くか。

「新八ー、神楽ー。」

ちよつと依頼きたからバトルロイヤルホスト行ってくるわー」

「僕らはいいんですか？」

新八の問いに「あー俺だけでいいわ。留守番よろしくなー」と返し、
とんとんと靴を履く。

「はい。」「いつてらっしゃいネ」という新八と神楽の声を背中に受けながら俺は万事屋を後にした。

「あ、旦那！ こつちでさア！」

俺に向かつて手を振る沖田の姿が見える。

「で、何なの？ 用って」

「こつちに来てくだせエ」

そう言う沖田に腕をひかれ、席へ連れていかれる。

その席には、沖田と同じ髪の色をした、キレイな一人の女が居た。

「大親友の坂田銀時くんです」

「なんでだよ」

俺は言いながら沖田の顔面を机に押し付けた。

「オイ、いつから俺たち友達になつた！？」

「旦那ア。友達つて奴ア今日からなるとか決めるんじゃない、いつの間になつてるモンでさア」

はあ？ 何だよ言うじゃねーか。ただな。

「そしていつの間にか去つていくのも友達だ」

そーゆーので俺に勝とうなんざ、十年早エぞ。

俺は背を向け、出口へ歩き出す。すると。

「すいませーん。チヨコレートパフェ三つお願いしまーす」

という沖田の声が聞こえた。

くそう、チヨコレートパフェ三つか。食いてえな。

どうするか。食いてえ。待てよ、いいのか？ さっき銀さんカツコ

つけたばかりなんだけども！

ああそうだ。依頼代つてことで貰えばいいんだ。そうだ依頼代だ。

なら食つていいんだよな？ 食つていいんだよな！？

依頼内容的にはアイツの友達のフリすりゃいいのか？ そうだよな？ よし、友達面しとくか！

「もー友達っていうかー、もー俺としてはー、もー弟みたいな？
まあーそういう感じかなあ。なあ、総一郎くん？」

「総悟です」

「こういう細かい所に気が回る所も気に入っててね？　ね、矢神総一郎くん」

「総悟です」

「チョコレートパフェ、旨いな。チクショーやっぱ旨いな。憎たらしいコイツの依頼でも受けよーかって気になるよな。」

そのとき、俺たちのアホ丸出しの会話を、さも面白そうに聞いている女が、声を発した。

「まあ、またこの子はこんな年上の方と。そーちゃん、あなた昔から、年上ばかりに囲まれて」

「大丈夫です。頭はずっと中二の夏の人なんで」

中二？　聞き捨てならねエぞ。ああでもやっぱチョコレートパフェ旨いな。

「中二？　よりによつておまえ、世界で一番バカな中二？　それアねーだろー加賀武くん」

「総悟です」

——　そついやあ。この女、随分と別嬪さんだが、誰なんだ？

俺がパフェを二杯食い終わつたところ、沖田が俺に小声で話しかけてきた。

「旦那ア、頼みますぜイ。姉上は肺を患ってるんでさア。ストレスに弱いんです。余計な心配をかけさせたくないんでイ。もっとしっかり友達演じてくだせエ」

あ、やっぱこの女、コイツのねーちゃんか。それにしても、肺を患ってるだつて？　大変だなあ美人なのに。

そんなことを考えていたら、スツと俺の前から最後のパフェが無く

なっていた。なんだ？ と訝しがりながら目で追うと。

今しがた沖田の姉だと分かったソイツが、なにやら赤い液体をパフエにかけていた。

「んア？ アレ？ ちょっとお姉さん？ 何やってんの？ ねえ？

お姉さん！？ それ、タバスコオオオオオ！！」

俺の叫びもむなしく、タバスコは一瓶まるまる使い切られている。中身は何処へいったのか。無論、俺の。…パフエの上だった。

「そーちゃんがお世話になったお礼に、私が特別美味しい食べ方をお教えしようと思って。」

辛いものは、好きですか？」

なんだよー。俺辛いもん苦手なんだよー。もう食べねーじゃん、あのパフエ。

「いやー、辛いものにも、本来辛いものじゃないからね？ コレ」

突然、沖田姉が咳き込み始めた。

「ゴホゴホ。やっぱり嫌いなんですネ？ ゴホン。そーちゃんの友達なのに」

オイイイ！！ ちょっと待て！

友達、関係なくねえ！？

「好きですよネイ？ 旦那」

ちよっ、待つ、沖田くん！ 刀を俺の喉にあてないで！ 銀さん可哀想だろ！

なんだ？ これア。今までにないタイプだ。なんか下手踏むと…。

「やっぱり、いいですよネ、辛いもの。私も病気で食欲がないとき、何度も助けられたんです」

「いやあでも、パフエ二杯も食べたから、ちょっとお腹いっぱいになっちゃったかなあー…なんて」

そう俺が言うが早いか、沖田姉はひどく苦しそうに咳き込んだ。

おい待て。なんでそんな？

姉の咳き込む様子を見た沖田は「旦那ア！」とこっちを咎めるように睨んできている。

なんだオイ？ 食えってか？こんなタバスコ丸々一瓶かった、この可哀想なパフェを食えってか！？

「み、水を用意しろオオ！！」

俺が叫ぶと、沖田姉が口から血を吐いた。

なあに？ 食べないと病状悪くなるってか？ これ！！ み、水も飲むなってかあ！？

「クッ」と言って倒れこんだ沖田姉を、沖田が「姉上！」と受け止める。

マズい！ と俺は焦ってタバスコがたっぷりかかったパフェを口に流し込むように入れる。

そう。タバスコが丸々一瓶かかっているパフェを、だ。

——俺は口から火を噴いた。

「姉上！ 姉上！ しっかりしてくだせエ！」

やべエ辛エ！ 辛すぎんぞコレ！

そうだ、俺は頑張ったが、大丈夫なのか！？ 吐血してたよな！？ そんな心配とは裏腹に、かえってきた答えはこうだった。

「大丈夫。さっき食べたタバスコ吹いちゃっただけ」

なんだとオオオオオオオオ！！！！

事件の始まり（前書き）

遅れましたね…；
文章書くのって難しいです。。。

事件の始まり

「あ、姉上。江戸を案内したいんですけど、銀時くんも一緒にいいですか？」

「あら、すみません、いいんですか？」

お忙しいんじゃない、と言う沖田姉に「構わねーっすよ」と返す。

「で、どこ行くんだ？」

「まだ決めてないんでさア。旦那、どうかオススメの場所とかありませんかねイ」

「そうだな、たしか今ちょうどジャンフェスやってるぞ」

俺が言うのと、沖田はため息をついた。

「旦那…それ旦那が行きたいだけですよねイ」

「御江戸観光には違いねえだろ」

沖田は少し考えて、こう言った。

「まあジャンフェスなら失敗なさそうですねイ。行きなれてるんでしょうから」

決まりだな。

「姉上、ジャンフェスに行きましょう」

「すごい人ね…。坂田さん慣れてるんですね」

「まあな」

「あら、真選組の隊服を着た女の子…。そーちゃん、真選組は…」

「あれはな、コスプレっつーので、実際の隊士じゃねえんだ。俺も

帽子でも買おうかな」

「あ、あそこに旦那の格好のモイマスネイ」

俺は買ったチヨッパの帽子をかぶって移動した。

この帽子は沖田姉にも可愛いと好評だった。それに浮かれている自分に驚いた。でも気分の悪い感情じゃなかった。

「今日は、楽しかったです」

「そーちゃん、色々ありがとう」

ミツバとは短い間で打ち解けられた。人柄だろうな。

まあはじめましての人としやべるのが苦手な人なら初対面の人のパフェにタバスコ一瓶かけたりはしないだろうがな。

「今日くらい、うちの屯所に泊まればいいのに。なにも、婚約者の家に泊まらずとも」

「ごめんなさい。こちらで色々やらなければならないことがあって

」

そう言うとミツバは俺の方へ向きなおし、

「坂田さんも、今日は色々付き合ってくれて、ありがとうございまして」

と言った。

「ああ、気にすんな」

俺はそう返す。最初は沖田に呼ばれて柄にもないことさせられてパフェを食べなくされて。でも、ミツバに会えたのも、沖田のおかげなんだろう。

俺は今まで会ってきた女たちとは違うものをミツバに感じていた。

「じゃあ姉上、ここで。先に入って下せエ」

沖田に促され、ミツバは「ええ」と返事をしながら“婚約者の家”の門を押す。

押した…と思ったら、中に入らず途中で止め、沖田を振り返り、躊躇いながら問いかけた。

「そーちゃん？ あの……。あの人……？」

あの人？

沖田は少し驚いたような表情をして、拗ねたようにミツバから視線を外し、

「野郎とは遭わせねエぜ。」

と言った。そして俺たちに背を向け歩きだした。

「今朝方も、なんにも言わずに仕事に出て行きやがった。薄情な野郎でイ」

……。

——野郎って誰なんだよ…？

「仕事、相変わらずみたいね…」

ミツバは少し寂しそうに目を伏せて言った。

さつきから、なんなんだよ、一体。

「オイオイ。勝手に巻き込んだいて、勝手に帰っちまいやがった」
ちよっとミツバの方に目を向けると、そこには想いを昔に馳せるかのような寂しそうなミツバがいた。

ミツバはゆつくりと語った。

「ごめんなさい、わがままな子で。

私のせいなんです。」

幼くして両親を亡くしたあの子に、寂しい思いをさせまいと、甘やかして育てたから。

身勝手に頑固で負けず嫌いで。そんなんだから昔から一人ぼっち。友達なんて一人もいなかったんです。

近藤さんに出会わなかったら、今頃どうなってたか。

今でもまだちよつと怖いんです。あの子、ちゃんとしてるのかつて。

本当は、あなたもお友達なんかじゃないんでしょう？」

そうか、幼くして両親亡くしてんだ、この姉弟。仲がいいワケだ。

「アイツがちゃんとしてるかって？　してる訳ないでしょ、んなモン。」

仕事さぼるわ、Sに目覚めるわ、不祥事起こすわ、Sに目覚めるわ。

ろくなモンじゃねーよ、あのクソ餓鬼」

俺の答えに、やはりミツバは風貌かおを曇らせる。

：こんなかわいそーな姉貴を、悲しませるような返事なんて、俺にや出来ねーよ。

「一体どういう教育したんですか。」

友達くらい選ばなきゃいけねーよ？

俺みたいのと付き合ってたら、口くなことにならねーぜ？　おたくの子」

俺の言葉に少し驚きを見せたが、ミツバは微笑わらった。微笑わらってくれた、だけで嬉しかった。

「おかしな人。でも」

「んあ？」

「道理であの子が懐く筈だわ。なんとなく、あの人に似てるもの」

「ああ？　似てる？」

あの人？

あの人って、さっきも言ってた奴？ コイツの知り合いで、俺に似てる奴？

コイツの、大事な奴？

じゃあなんだ？ ひょっとして、俺とすぐ打ち解けたのも、ソイツに似てたからなのか。

誰なんだ。

おかしい。俺がこんなにグルグル頭ん中で考えたりするなん、

——キキーツ！

そのときブレーキ音が聞こえた。

パトカーだった。

パトカーからは人が現れ、降りながら言う。俺は驚いた。

「オイ。てめーら。そこでなにやってる。」

それは、明らかに聞き覚えのある声で。

ただ、驚いた理由は、ミツバがソイツを見てハッとしたようだったからだ。知り合いだったのか？

「この屋敷の」

野郎は言いかけたが、ミツバを見て驚いたようで、言葉が止まった。なんだ？ コイツら知り合いか？

2人して絶句って…。

——そっぴやアイツら試衛館だかなんだかいう道場で一緒だったんだっけか。とするとミツバも出身が同じってことになるのか？ …にしてもだ。なんなんだよ。明らかに変だろ。知り合いでも。

少しの沈黙の間、パトカーのエンジンの音だけが聞こえていた。

その後、最初に口を開いたのは、ミツバだった。

「…と、十四郎さ……」

ゲホッ

ゴホン　ゴホン　ゴホゴホ

蚊のなくような小さな声で呟くと、ミツバは急に咳き込みはじめた。それに驚く野郎の顔が視界の隅にうつった。

「あっ」

そう呟いて、おそろおそろ伸ばされた野郎の手は、倒れていくミツバには届かなかった。

俺はあわてて倒れたミツバに駆け寄る。

「おい！　しっかりしろ！

おい！！」

パトカーのエンジン音も消えた静けさの中、俺の叫ぶ声だけが辺りに響いた。

小さな恋心

そうか。俺は、惚れたのかもしれない。

「ようやく落ち着いたみたいですよ。身体が悪いとは聞いちゃいたが、俺たちが思ってるより、病状は良くねえみたいで。

それより旦那、アンタはなんでミツバさんと？」

パトカーには山崎もいた。ただの山崎じゃなくて…アフロヘアの山崎が。

ふすまを少し開けて、覗き見しながら言う山崎に、俺は饅頭を食いながら答える。

「成り行き。そういうお前はどうしてアフロ」

「成り行きです」

「どんな成り行き」

俺は、ずっと思いつめたような顔をして突っ立ってる土方の方を見て、言った。

興奮しちゃいけない。感づかれちゃいけない。冷静に、冷静に。

「そちらさんは…成り行きって感じじゃなさそうだな」

土方は煙草を吸い続けて黙っている。

「ツラア見ただけで倒れちまうたア、余程のことがあったんじゃないの？ おたくら」

土方はこちらをチラリとも見ずに言った。

「てめえにや関係ねエ」

やっぱりか。コイツはミツバに惚れてやがる。

「すんませーん。男と女の関係に、他人が首突っ込むなんざ、野暮ですたア。ほんとすんませーん」

俺は奴を挑発するように言った。

「ダメですよ、旦那ア。ああ見えて副長、ウブなんだからア」

山崎も俺にのってアイツを挑発した。

すると、我慢できなくなったらしく、土方は刀を振り上げ叫んだ。

「関係ねえつつつてんだろぅがアア！ 大体なんでてめえここにいるんだよ！」

「副長、落ち、落ち着いて！ 隣に病人がいるんですよ！」

山崎が土方を後ろから止めて、至極真つ当なことを言った。

…が、土方はあいかわらず俺に刀を向けている。

「うるせえ！ 大体お前なんでアフロなんだよ！」

土方と山崎がもめていると、ふすまが開いた。

「みなさん。何のお構いもせず、申し訳ございません。

ミツバを屋敷まで運んでくださったそうで、お礼申しあげます

私、貿易業を営んでおります、『転海屋』蔵場当馬と申します」
刀をしまつ土方に山崎が耳打ちする。

「ミツバさんの旦那になるお人ですよ」

「身体に障るゆえ、あまりあちこち出歩くなと申ししていたのですが…
今回はうちのミツが、とんだご迷惑を…」

——— うちのミツバ、ね…。いや、まあ間違っちゃいねーんだが。
どうも、ムシヤクシヤした。

「もしかして皆さん、その制服は…真選組の方ですか。

ならば、ミツバの弟さんのご友人、「友達なんかじゃねーですよ」

蔵場の話遮って部屋に入ってきたのは、沖田だった。

「総悟くん！ 総悟くん、来てくれたのか、ミツバさんが…」

沖田は、蔵場の話には全く耳を傾けず、まっすぐに土方の方へ歩いて行き、またもや蔵場の言葉を遮って話した。

「土方さんじゃありやせんか。こんな所でお会いするたア奇遇だなア。」

どのツラ下げて姉上に会いに来れたんでイ」

ハア？ 会いに来れた…って……。

「……………」

土方は黙り込む。

俺はまんじゅうを食って糖分を補給した。考えなきゃいけないだろうし、それにや糖分が必要なんだね。

「違うんです、沖田さん。俺たちはここに…うおああ！」

状況が分からないなりに弁解しかけた山崎を一蹴すると、その襟首をつかみ引きずりながら、土方は去っていった。

「邪魔したな」

…ほんと邪魔だ。ミツバが倒れたのは、おまえのせいだろ、ぜってー。

「土方さん、いいんですか？」と焦った山崎の声が遠くなっていく。

—— お前がミツバを倒れさせたくせに…最後の最後に、ミツバと目エ合わせてんじゃねーよ。

俺は、ミツバの寝ている部屋の横を土方が通るときに、ミツバが寂しげな表情で野郎を見つめているのも、ずっと目を向けなかったくせに最後にミツバを見た土方も、野郎が去ったら目を閉じたミツバも、全部見ていた。

もう、分かった。

ミツバの言っていた、知り合いの俺に似ている”あの人”ってのが土方の野郎だったこと。

土方にとってミツバは大事な奴だったこと。

ミツバと土方がお互いを見て驚いて絶句したのは昔なにかあったからだったこと。それに関して沖田は土方を許せないでいるということ。

それに関して土方もミツバに負い目を感じていること。

ミツバと土方はお互いに想いあっているということ。

小さな恋心（後書き）

今回はちょっと短いですがまあ早く書けたので（↑前回は遅すぎただけ

良かったです。

普通の人に比べればかなり遅いですけど…笑

幸せに忍び寄る影

「…おい。俺らもおいとましょーぜ」

俺は沖田に声をかけた。もう帰りたかった。

「旦那。」

沖田は悲しそうで寂しそうで苛立ったような表情で俺を見た。

コイツも心の傷にふれたんだ。それに、コイツ、まだ18とかじゃねーか。

傷つけあうのは、簡単だ。

「お帰りですか。すみませんね。ミツバをありがとうございました。総悟くん、今日はもう遅いから、病院には明日行こうと思う。

仕事があるだろうから、入院先が決まったら伝えるってことで、いいかい？」

蔵場が立った俺たちに話しかける。

「はい」

俺はチラッと沖田を見て「お邪魔しました」と言った。

大丈夫かと心配したが、俺が歩き出すと、沖田はちゃんと付いてきた。

「なあ」

俺たちはぶらぶら並んで歩いた。

「俺、ミツバの見舞い行くよ。入院先が決まったら、教えてくれ。」
俺はゆっくり言った。間違いがないように。

「あと、コレ、渡しといてくれ。万事屋だからなんでもするからつてよ」

「旦那。旦那は…」

万事屋の電話番号が入った名刺を渡す。

沖田は、何か言いかけてやめた。それから、昔を思いだすように、目を細めた。

きっと、それはミツバも土方も思いだしているだろう記憶。

月が綺麗に出ている夜だった。

「…ただいま」

「銀ちゃん！ 遅かったアルな。今日は帰ってこないかと思ったアル。」

当然、新八は帰っていたが、神楽は起きていた。

俺の顔色が出て行ったときと違うのに気付いたのか、心配そうな顔でこう言った。

「銀ちゃん、悪い依頼だったアルか」

「…いや。」

お前、沖田に姉貴がいるの、知ってたか？」

「姉御が？」

知らねーよな、まあ普通に。

「明日、新八にも一緒に教えてやるから、今日は悪いけど寝かせてくれ」

「銀ちゃんに言われなくてももう寝るところだったアル。夜更かしは美容の大敵アルからナ」

神楽は布団に入りながら言う。

「銀ちゃん。…よく寝た方がいいアルよ」

ああそうだな。今日は自分でいっぱいいっぱいだ。

「おはようございまーす」

「新八！ 沖田に姉御がいるって知ってたアルか？」

「えっ！？ 沖田さんに？」

「昨日、銀ちゃんが会ってきたっぽいアル！」

驚いた新八の声が聞こえる。

俺が考えたこと。

新八と神楽に、ミツバに会ってもらう。

沖田と年の近い奴もいるんだって。

ミツバは、喜んでくれるだろうか。

「沖田さんに姉上が？」

「ああ。どうも婚約したらしくてな、江戸に出てきたんだ。

で、昨日は江戸を案内しようとしてた沖田に呼び出されて一緒にジャンフェスに行ってきたんだわ。

それが、どうも、もともと身体が悪かったようだな、夜にぶっ倒れちまったんだ。まあ色々あってな。

俺ア行くつもりなんだが、お前らも見舞いにこないか？」

土方のことを言うのは、今じゃなくても、いい、だろう。言うのは躊躇われた。

「え、それって、銀さんのせいで倒れたんじゃないですか？」

「ちげーよ、んなワケねーだろ。ちよっと色々あったつつたじやねーかよ。

それでまあ沖田に友達がいるか心配しててよ。」

「行くアルよ」

神楽がキツパリと言った。強い眼をして笑っている。

「お見舞いですよね。行きます」

優しいからな、コイツらは。

トゥルルル

俺たちが食パンと白米の昼飯をとっていると、電話が鳴った。

「もしもしー、万事屋ですけどー」

俺は急いで口の中のを飲み込んで受話器をとった。

その受話器からは愛らしい声が聞こえた。

「あ、坂田さんですか？ 私です、ミツバです」

俺はふつと微笑んだ。

新八たちを連れて行くのは、2回目しよう。…初めは、俺だけで

「そーちゃんから、名刺をもらったんです。」

それと、『見舞いに行くから病院を教えてほしい』って言うてた
って聞いて。」

「ああ、行くつもりだからよ、教えてくれるか？」

「ありがとうございます。大江戸病院の218号室に居るんです。」

それと万事屋っていうから、ちよつと依頼してみたいんですけど、
いいですか？」

「お、おう。依頼内容は？」

俺の質問には、ミツバらしい返事が返ってきた。

「辛い食べ物を買ってきてください」

俺はコンビニで買った辛そうなスナック類の入った袋を手にはぎ、ミツバが入院しているという大江戸病院にやってきた。面会の紙って書くのが面倒だなと考えつつ、病室をメモした紙を出す。

—— 218号室

病室につくと、中からは蔵場の声がして、俺は入るのを躊躇った。俺は蔵場がどうも苦手だった。

外で、蔵場が出て行くのを待つことにして、病室からは見えないように隠れて病室を覗いた。

ミツバと蔵場が談笑していて、嫌な気分になった……ところでミツバのベッドの下に、山崎が居ることを発見する。
なにやってんだ？ あいつ。

「それじゃ、僕は仕事があるから行くけど、辛いものとか摂っちゃ駄目だよ、身体に障るから」

「わかってます。私もそこまで馬鹿じゃありません」

「それじゃ。また来るよ」

蔵場が出て行ったのを見届けると、俺は買ってきた大王バフットの袋を部屋の入り口に覗かせた。

カサッという音に気付きミツバがこっちを向いたのを確認すると、俺も顔を出した。

ちよつとしたイタズラ成功だ。

「ふふっ」

ミツバが身体を起こしながら言う。

「すごい。ほんとに依頼すれば何でもやってくれるのね」

「万事屋だからな」

買ってきたスナック菓子の入った袋をベッドに乗つける。

「おーら食いすぎんなよ。痔に障るぞ」

「あなた、私が痔で昏倒したと思ってるんですか」

俺は蔵場が持つてきたであろう果物の入った籠からバナナを取り出し、皮を向きながら、ミツバのベッドの下にいる山崎に目をはしらせる。

コイツの存在を口にしていいものか、多少迷ったが、まあ言いだろ
うと判断した。

ミツバになんか文句あんのか、コノヤロー。” 沖田隊長” の姉だろ。
失礼だとは思わねーのか。

「おい、おめーもどうだ、バナナとかもあるぞ」

俺の言葉に、隠れるかと思っただが、山崎はソーセージを持った手を
突き出し「いいえ、結構です。隠密活動のときは常にソーセージを
携帯しているので」と返事をした。

俺はしゃがみ、ミツバはベッドの上から覗き込んだ。

「あれ、山崎さん？　なんでこんなところに？」

ミツバが問う。

「しまったアアアアア」

コイツ、馬鹿すぎねーか。

しかも、叫びながらベッドに頭をぶつける始末。

俺は「あたたたた痛い、痛い」と言っている山崎を足でガシガシと
蹴った。

「そうだ」

「なんですか？」

俺は山崎を蹴るのをやめ、山崎はようやくベッドの下から出てきた。
俺はミツバに向き合い、神楽と新八のことを伝えようとしていたこ
とを思い出した。

「俺のやってる万事屋ってな、俺ひとりじゃねーんだ。新八っての
と神楽ってのとやっててよ。」

今度、ソイツらも連れて来ていいか？」

「嬉しい。坂田さんと同じくらいの方？」

「いや、お前の弟と似たよーなモンだ」

ミツバは少し驚き目を丸くしたが、「ふふ」と微笑んだ。

「そうなのね」

「あ、それと…」

坂田さんつての、やめねーか？ 銀さんで呼んでもらって構わねーからよ」

言つのにちよつと勇気がいった。

「銀さん？」

「ああ、新八たちにもそう呼ばれてっから」

ミツバは「分かりました、銀さん」と微笑んでくれた。

「具合どうですかー。あ、沖田さん、面会中でしたか。」

俺たちが他愛もない話をしていると、看護婦さんがやってきた。

「あ、もう帰るので、いいです」

他人に見られたってことがなぜか恥ずかしくて、俺はつい口走ってしまった。

「銀さん」

「悪イ、また来るからよ」

俺が山崎に目配せすると、それに気付いた山崎は「おじゃましました」と言い、病室を出た。

俺は、何も言わずミツバの方も見ず、さっと病室を出た。

山崎と俺は病院の屋上に来ていた。

なぜ、山崎はミツバのもとへ、
” 隠密活動 ” をしに来ていたのか。
それを、問うため。

幸せに忍び寄る影（後書き）

ちよつと銀さんが変態っぽい…笑
そんなつもりないんですけどねえ；
文才が欲しい。

残酷な真実（前書き）

——「この世界が、『ありがとう』『でいっぱいになれ』に
ね・・・」

残酷な真実

「どうして、”隠密活動”してたんだよ。”沖田隊長”の姉だろ？」
俺は静かに言った。…つもりだったが、声は多少震えていた。

「ミツバ殿の嫁ぎ先の転海屋、攘夷浪士と黒いつながりが…」

”沖田隊長”の姉上の旦那は、真選組の敵なんですよ。
オレたち

土方の野郎は、ミツバに惚れてて、その野郎がミツバの婚約者をしよっぴこうとしている。

公私混同をする奴じゃねエ。

その野郎が、そうすると決めたんなら、俺はなににもできねエ。なにもする訳にはいかねエ。

「あの女は知ってんのかよ」

「いえ、副長に誰にも言うなと」

バシッ

言われて…と続けようとした山崎の頭をはたいてツッコむ。「言っ
てんじゃねーか俺に！」

「痛てっ！ いやだってそれは旦那が」

「俺がなんだよ俺のせいだよ」

バシッ

俺はまた山崎の頭をはたく。

「それで、見張りしてたのか」

「まあ、そういうわけです」

俺のたたいたところをさすりながら山崎が答える。

「俺…もう見舞い来ない方がいいのか」

「…珍しいこともあるもんですね、旦那。」

旦那なら、俺たち真選組の都合なんて関係なしに、行動すると思っ
てました。

俺が来ないでくださいって言ったところで、『ケツ、お前らなん
て知るかよ』みたいな」

「旦那…」

山崎は少し間をあけて、小さいけれど、はっきりした声で言った。

「ミツバ殿に惚れましたか」

「……………」

言われる気がしてた。山崎からそんな雰囲気が出てた。

俺は黙るしかなかった。

「ミツバ殿と、土方さんのことですか」

二人が想い合ってるなら、俺は、ミツバに惚れたなんて、言えない。
認められない。

そんな俺の考えを察してか、山崎は、自分の問いかけに答えない俺
の眼をまっすぐ視て言った。

流石は、幕府お抱えの真選組で活躍する優秀な観察方だけあって、
察する能力には長けているようだ。

「…ああ」

俺は重たい口を開く。

「あの二人がどんな関係かっていうのは、すいませんが、俺もよく
わかりません。」

ただ、副長は、ミツバ殿のことが好きだったみたいです。

今もお互い大事な人なんじゃないかと。」

「…男と女の関係に首つつこむのは野暮ってか……」

「旦那」

山崎が俺に呼びかける。

「男女の關係に他人が首つつこんじゃいけねエとは思ってるんです。だけど、どうなっても。」

俺は、ミツバ殿に、幸せになってもらいたいです」

——…俺もだ。

幸せって、なんだ？

そもそも、幸せってなんなんだ？

蔵場当馬は、闇商人。

あんな奴と結婚しても、ミツバは幸せになれない？

結婚することによって生まれる幸せってもんも、あるんじゃないのか？

結婚したことの無い俺にはわからないか。

仮に結婚したことがあっても、俺は男、ミツバは女だからわからないか。

俺とミツバは違う人だから、わからないか。

俺にはどうすることもできないか。

幸せってなんなのか。

そもそも、幸せなんて、その人自身の価値観とかで決まるもんなんだ。

俺の見つけた、答え。

俺は俺なりに、俺の方法で、ミツバを幸せな気分にならせてやればいいんだ。

だから『新八と神楽を、連れて行く』って決めたんじゃないか。そのとき、俺の脳裏を山崎の言葉がよぎった。

——「沖田隊長”の姉上の旦那は、真選組の敵なんです」
オレたち

いけないのか？

俺の考えた、できることは、邪魔になるのかもしれない。

——そう、今の俺は、酷く弱気だった。

「なあ、俺、新八と神楽を連れてくるって言っちゃったんだが…やめた方がいいか」

山崎に顔は向けずに問う。

「旦那だけ来ても、新八くんたちと三人できても、たいして変わらないですよ。」

俺たちに気を使ってもらえるのは嬉しいですけど、旦那の自由にしてください。

旦那らしくないですから」

さつきから弱気ですね、なんて言葉は、山崎の口から出なかった。山崎は、優しい声音で言った。きっと薄く微笑んでいるんだろう。ただ、今の俺には、そんな山崎の方を向く勇氣さえなかった。

「……ありがとう」

俺の口を衝いて出た言葉。

それは、俺はあんまり使わない言葉。

だけど、大切な言葉。

きつとミツバは、よく使う言葉。

残酷な真実（後書き）

土方さんも沖田も言うイメージないですよね…。

交錯する想い

「うつわ、ほんとにあのサドの姉御アルカ!? ぜんぜん似てないアル! ごっさ綺麗ネ!!」

「ちよつと神楽ちゃん、病院だから、ここ!

静かにして、ね!？」

叫んで騒ぐ神楽、そんな神楽に焦る新八。

「フフ、ありがとう。綺麗だなんて」

いつも通りの万事屋を見て、楽しそうに笑うミツバ。

「ミツバ姉^{ねえ}って呼んでいいアルカ!？」

「えっちよつ神楽ちゃん! いきなりそんな呼び方…」

「あら、嬉しいわ。神楽ちゃんっていうのね」

ミツバはふふ、と微笑む。

よかった。失礼なことすんじゃねエかとちよつと心配してたが、まア、初対面でもすぐに馴染めるのがアイツらのいいところだな。

「すみません、自己紹介がまだでしたよね。僕、志村新八です。」

神楽ちゃんの言動で、なにか気にさわつたらすみません」

「新八イイイ! お前新八のくせに何言ってるアルカ!……!」

わあわあ叫んでる神楽の隣で、動じず微笑みを崩さないミツバ。きつと、あの真選組の連中といたから慣れてるんだろう。

そんなことを考えてると、俺も自然に、微笑^{わら}えてきた。

「沖田さんのお部屋はこちらです」

「案内してもらっちゃって、すみません、ほんと」

ナースに連れられ、遅れて来ると言っていたお妙が入ってきた。

「ちよつと、うるさいですよー。静かにしてください」

お妙を案内してきたナースが少し顔をゆがめて言った。

「あら、ごめんなさい」

「あー、すんませーん」

ミツバにつられ、俺も謝る。

「銀さん、怒られてるんですよ、なにちよつと微笑み浮かべちゃってるんですか」

「銀ちゃんキモイアル。Mが開花したアルカ」

「んなわけねーだろ！」

「あら、新ちゃん神楽ちゃん、違うわよ、銀さんはナースを見てニヤニヤしてるだけなんだから」

「勝手にしとけ……」

ミツバの前で恥ずかしいだろーが。なんだよ、連れてこなきゃよかったぜ……。

なんて思っても、チラッと見たミツバの楽しそうな笑った顔に、そんな感情は掻き消されてしまった。

「あ、自己紹介が遅れちゃいましたね。新ちゃんの姉の、志村妙です」

「沖田ミツバです。来てくださって嬉しいわ。ありがとうございませう」

「私たちでよければ、また来ます。真選組は忙しそうですものね」

このふたり、正反对だと思っていたが、芯は似てるんじゃないか？なんて俺が考えていたら、ガラッと扉が開くような音がして、窓が開き

「いやあ、確かに忙しいですけど、お妙さんのためなら、どこでも馳せ参じますよ。」

それにしても、ミツバ殿とお妙さん、二人並ぶとほんと美女ふた

りって感じで」

「近藤さん!？」

忙しいはずの真選組局長、近藤が入ってきた。

「…どっから入ってきやがったアアア!」

「あべし!」

近藤は、左頬を勢いよく殴られた。

「びっくりした…。どうしてここに？」

それに、お妙さん、こんなことできるんですね」

瞳を見開き驚いているミツバに、新八が説明をする。

「あ、あのですね、近藤さんが姉上に一方的に惚れこんでしまつて近藤さん、ピュアというか、まっすぐなので、姉上を追いかけているんですよ」

なるほど、さすが新八だ。ストーカーという言葉を使わずに説明できるとは。

「ふふ、近藤さんは、そんな感じよね。」

近藤さんはいい人よ。お妙さんには心に決めた人がいるのかしら。楽しそうに言うミツバに「いや、なんというか、」と新八が言葉を濁す。

「今日は、ありがとうございました。こんなに大勢でおしゃべりしたのは久しぶり」

微笑みを浮かべるミツバに

「こちらこそ、大勢で押しかけちゃって…」

「うるさくしまつて悪かったな」

「ミツバ殿、お大事になさってくださいよ」

「ミツバ姉、また来るアル!」

「また来ますね」

口々に言い病室のドアから出て行く。

そのとき、

「ごめんなさい。銀さん、ちょっとだけ、いいかしら」

……！？

「……ああ」

とにかくびっくりして、少しだけ、身体が強張った。

窓の外では、雨が降り始めていた。

外にいた医師たちが、慌てて病院内に駆け込む。

車椅子のババアを気にするナースもいた。

アイツら、傘もってたかな。

神楽しか持ってなさそうだが…アイツらは濡れても風邪ひいたりしないか。

ミツバとは違うんだから。

俺は、ミツバのベッドの横の椅子に腰掛ける。

「銀さん」

ミツバが静かに俺に話しかける。

「昨日は、山崎さんとなにを話していたんですか」

ちよっと躊躇いがちに口を開くその姿は、さっきまでとは別人なの

かと思うような、寂しげな姿だった。

「んあ？ 何でもねエよ、気にすんな」

「そう言われると、余計に気になります」

ミツバはくすりと笑った。

俺は、懷からビデオを取り出し見せながら、嘘をつく。

「野暮なこと聞くねエ。」

男が隠れてコソコソ話してたら、コレの話題に決まってるだろう？ アンタも見る？」

「もう！ 男の子って、いくつになってもそうなのね。」

集まってはつるんで悪巧みばかりして。

あの人たちもそう。男同士でいるときに、いちばん楽しそうで。結局、女の子の入り込む余地なんてないの。

みんな私を置いて行ってしまったわ。…振り向きもしないで」

眼を閉じて、思い出を大切そうに語るミツバ。

「こないいい女をほつといて行っちゃうんざ、酷い連中だねエ」

「え？」

「そうでしょう？ だから私、めいっぱい幸せになって、あの人たちを見返してあげるの。」

こんな年までひとりで、身体のことでもそーちゃんには心配かけてしまったもの。

幸せになって、そーちゃんを安心させてあげなきゃ。

幸せにならなきゃね」

——「ミツバ殿の嫁ぎ先の転海屋、攘夷浪士と黒いつながりが……」

ミツバが、俺をひきとめたのは、何故なんだろう。

そうか。

きつと……コイツは気付いているんだ。

ほんとに、酷い奴らだ。

真選組の連中も、転海屋も、けっきょく嘘をつくことくらいしかできない俺も。

ゴホゴホ

ゴホッゴホ

ミツバが咳き込み、俺は焦りをおぼえる。

「おい、大丈夫か。もう休んだ方が。身体に障るぞ」

「大丈夫…です。もうちょっと、誰かと…お話してきたいの」

ゲホッゲホッ

咳はとまるどころか、勢いを増す。

そして、

——ボタッ

血が、したたる。

俺は息を呑んだ。

「おい！」

まだ咳き込んでいるミツバは、口を手で押さえるが、指の間からは血があふれていた。

「来てくれ！」

俺は病室の外にいたふたりのナースに声をかける。

「は、はい！」

「え！お、沖田さん！」

運ばれていくミツバのあとを追いかけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1852s/>

紅葉が見たもの

2011年12月2日10時47分発行